

顧問挨拶

◇智略基礎研究

兵庫県立先端科学技術支援センター 所長

千川 純一

「国鉄の民営化」から始まって、最近の「規制緩和」「地方分権」まで、自由競争の原理が、冷戦の終結後、一層重視されてきました。以前に「壮大なムダ」が大切という主旨で、今はなきソ連で行われた研究規制「シリコンの結晶成長の研究は国内二ヶ所です。日本では同じような研究をほうぼうでやって、同じような成果を競う。そんなムダはしない」という例を挙げました。一見、合理的に見える方策やコントロールが衰退の原因であり、同じ分野での自由競争が必要と思われます。

日本学術会議の伊藤正男会長は「ストラテジック・リサーチの推進」を提言され、また、最近、科学技術基本法が成立して、にわかに大型の研究プロジェクトが科学技術庁、文部省、通産省等で走ることとなり、それぞれに「戦略的基礎研究」「産業科学技術研究開発制度」などの名のもとに発足しました。名称は異なってもプロジェクトの中身や仕組みはよく似ており、どれも同じパターンで基礎研究の推進を競う構想のように思われます。

しかし、同じパターンのプロジェクトが「戦略的」といえるのか、「戦術的」基礎研究ではないかと心配されます。もっと各省庁の特色があってよいのではないのでしょうか。たとえば、文部省関連のプロジェクト研究では、波及効果として若手研究者育成の視点を重視した戦略、通産省では半導体産業に続く新産業の探索という具合に、各省庁で色付けがあってこそ、戦略的と言えるような気がします。

「戦略」という言葉は「戦術」とまぎらわしく、プロジェクトと提案する側も「戦術的基礎研究」を考えがちです。そこで、プロジェクト研究の主旨を明確にするため「智略基礎研究」とした方がよいと思います。

とくに、大型施設を利用する研究に対して色づけを期待したいところです。一般に広く浸透した誤解が潜在しているように思えるからです。というのも、科学研究費の申請やプロジェクト研究の提案をすると、大型放射光施設SPring-8の建設費は1100億円、その中でなぜ予算がとれないのか、という質問をしばしば受けるのです。

ユーザーにとっては、光源の性能が生命線です。しかも、急速に進歩する光源技術のなかで10年先でもAdvanced Sourceをと考えると、各ビームラインの測定機器よりも光源に投資がなされます。しかも、利用研究費が確保されているわけではありません。その結果、ユーザーの研究費はどうしても不足がちになり、研究の高度化のためには「戦略的基礎研究」に応募、しかし不採択という羽目になるわけです。このような状況が続けば、せっかく大型施設に巨額の投資をしても、それに見合った研究成果が得られないことになります。まさに、「九仞の功を一簣に欠く」思いがします。放射光利用研究が始まって数年間で良い成果を出さないと、長直線部を利用するX線FELなど、次期計画に響くのではと心配です。

今こそ、光源の性能を活かした智略基礎研究を推進するため、大型光源の建設という九仞の功に一簣を盛る智略的政策をお願いしたいと存じます。